

巻頭言 副会長挨拶

青山 真人 (宇都宮大学)

この「動物の行動と管理学会」は、「日本家畜管理学会」と「応用動物行動学会」が、より総合的、体系的、精密な「動物の行動に立脚した管理」を目指し、2019年に正式に統合されました。さあ、これから、というところでしたが、皆様ご存知のとおり、2020年度は新型コロナウイルスに振り回された年でした。学会活動も充分にはできず、会員の皆様にはご不便をおかけしました。前回のニュースレターで矢用会長からも「申し訳ない」とあったとおり、副会長としても心苦しい限りです。

10年前の震災とそれに伴う原発事故のときにも感じたことですが、今回のコロナ渦でも「非常時の動物の管理」ということが、まだまだ



不十分であると感じました。今回のコロナ渦では、大学への教職員や学生の立ち入りが大幅に制限され、実験動物や附属農場の産業動物、あるいは馬術部のウマなどの管理に、大きな支障が生じたことと思います。私が所属する宇都宮大学では「実験動物の維持管理」については学生の入構も認められ、なんとか動物を維持することができました。また、宇都宮大学では部活動禁止の中、馬術部では特別にウマの世話と運動は認められましたが、新生が入らず(勧誘は禁止されていた)、活動を少ない人数で回さなければなりません。さらに、ウマを使った幾つかの大会の中止から、毎年入っていたバイト代(要は「運営費」)が入らず、経済的にもかなり苦しかったです。宇都宮大学の附属農場の方でも、これまで実習によって作業を進めていたところもあったので、それができずに非常に苦労したようです。これらは大学の事情ですが、大学以外の様々な動物を管理している機関でも、類似のご苦労があったことと思います。一方で、動物がいることによって、外出制限から来る閉塞感を緩和する効果もあったのではないかと思います。私は運動不足解消のため、週2~3回のジョギングをしていますが、あらためてイヌの散歩をさせている人たちをよく見かけました。(時間帯の問題かも知れませんが)前は1人で散歩をさせている人が多かったのが、このコロナ渦においては、お子さんを連れてイヌの散歩をさせている人たちをよく見た印象があります(複数人で出かけるのがいいかどうか、という話しは別にして)。私は現在イヌを飼っていませんが、イヌを飼っている人たちにとっては散歩に出かけるモチベーションとなり、普段は1人でしか出かけるべからぬところを家族で出かけるようになったのではないかと勝手に想像しています。何か、普段にはない良い効果もあったかも知れません。

非常時に動物をどう維持管理するのか、また、非常時にはどんな動物からの有益な効果が期待できるのか、これらのことも、今後この学会で扱う分野の一つになるかも知れません。

今回のコロナ渦によって、リモートでの学会発表やシンポジウム開催についても幾つか経験し、このような状況でもできる学会活動のノウハウも、少しずつ分かって来ました。コロナ渦が過ぎた後も、ここで得たメリットは活かして行けると思います。また、まだ若干の不安があるものの、ワクチン接種も始まっています。まだまだ油断は禁物ですが、2021年度はできることから、学会活動を盛んにして行こうと考えています。

先ほどリモートのメリットにも触れましたが、やはり会員の皆さんと実際に会って、学会発表、シンポジウム、懇親会での真面目な議論や馬鹿話し、そして翌日にはほとんど忘れていく(あ、これは私だけか)、という経験が重要であると考えています。そのような普通の日々に早く戻ることを願っております。

特集 コロナ禍におけるポジティブな話題

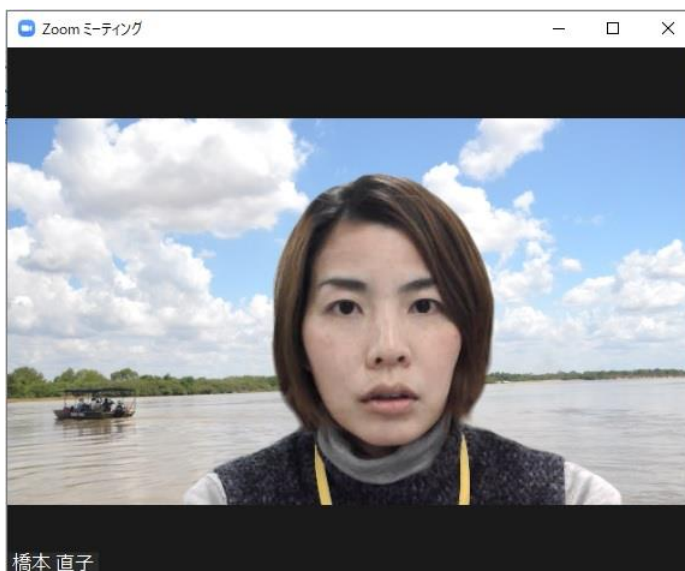
オンラインツールの利活用で前向きに

橋本直子(京都大学霊長類研究所)

さまざまなオンラインツールの普及により、約1年前にはZoomというアプリの存在すら知らなかった私も、いまはどっぷりお世話になっています。慣れないうちは会議で発言しにくいとか、表情が読み取れずコミュニケーションへの不安を感じることもありました。しかし霊長類の飼育管理に携わる身として、アウトブレイクへの危機感もあり致し方ない現実だと受け入れるのにそう時間はかかりませんでした。また、企画していたセミナーの延期を余儀なくされ、楽しみにしていた講演会も中止が続くなか、ウェビナーの普及やオンライン形式への転換はとて心強いものでした。もちろん、実際に会場へ出向いている方々と話し意見や想いを共有することで得られるリアル体験とは異なるものの、メリットもたくさんあります。移動時間や交通費も抑えられますし、私にとっては出張によって日常の飼育業務に穴を開けなくてよいことは何より安心です(欧米のウェビナーだと時差のせいで深夜スタートですが…)。

私自身は2013年に発足したSHAPE-Japan(<http://www.enrichment-jp.org/>)事務局の一員としても活動しています。当団体では年1回程度、国内の動物園の協力のもと、環境エンリッチメントに関するワークショップを開催しています。しかし今年度はコロナ禍で実施できる見込みがなく(なんせとても濃厚接触なので…特に夜が)、中止と判断せざるを得ませんでした。でも、これまでの活動を通して、学びや体験を求めている人がいること、そして動物福祉に配慮した環境づくりはどんな状況でもそれに応じた内容で進めていく必要があると確信し、2020年7月より月1回程度でウェビナーの配信を開始しました。事務局メンバー一同、本業を抱えつつも深夜までミーティングを重ねることもありましたが、おかげさまでこれまでの全7回、すべて満席でご参加いただいております。年1回のワークショップではどうしても会場や内容の都合上、参加者の所属も限定的で定員に限りがありました。ウェビナーではその幅が大きく広がったこともメリットでした。動物園の方だけでなく、愛玩動物や実験動物に関わる方々のご参加も多く、熱心な質問が飛び交い、発信する側もとても刺激的な時間を過ごす機会となっています。また、11月には(一社)実験動物技術者協会関東支部よりオンライン講演会の依頼をいただき、SHAPE-Japanから代表して萩原慎太郎(福山市動物園)が異業種交流の道を開きました。

今後も新たなテーマや内容でウェビナー配信を続けていくつもりですので、ご興味ございましたらぜひともSHAPE-Japanとググってみてください。私たちの活動におきましては、これまで動物の行動と管理学会会員の多くの先生方のサポートもいただき成り立ってまいりましたことも、この場をおかりしあらためて御礼申し上げます。オンラインの利活用には期待しつつも、やはり画面越しではなく肩を並べて飲み交わせる日が待ち遠しいですね。



新型コロナウイルス感染症下での活動と今後について

奥野尚志

(一般社団法人アニマルウェルフェア畜産協会)

一条の光が見えたようですが、このトンネルはまだしばらくは続きそうです。当初は真っ暗で何も見えなかったのですが、ようやく、ずいぶん目慣れてきたようです。今が当たり前になっては困るのですが、不自由な中にも新しい手立て、手法を見つけました。

その一つがインターネットを利用したセミナーの開催等でしょう。(一社)アニマルウェルフェア畜産協会も昨年3月に実施するはずのシンポジウムの中止、延期を余儀なくされましたが、9月にウェブで実施することができました。遠隔の方々にも多数参加いただき、異なる分野、観点からの意見を頂戴し、大変有意義なシンポジウムとなりました。本来ならば参加できなかった方々にも聴講いただきました。中小、家族型経営農家には、AWIに高い関心、興味を抱く方々も多いのですが、セミナー参加のために移動等を含めて長時間を割くということが困難な方が多いのも現状です。しかし、そのような方にも参加していただけたのは大変有意義であったものと思います。今後も生産者と消費者、行政、研究者等を結ぶに極めて有効な手段となり得ることを知りました。

しかし、このトンネルを出たその時に、あまりの眩しさに目を閉じないようにしなければ。目をつぶってしまつて方向を見失わないように、いつまでも暗闇の中で手にしていた明かりばかりを頼っていてはと思います。獲得した一つのツールを有効に活かすことで、より発展的で有機的な関係を築くにふさわしい方策もあろうかと思えます。

改めて新型コロナウイルス感染症を考えたとき、その感染経路の解明や医学的見地からも、ヒト、家畜、野生動物、ペット等の区分なく研究に関わる動物の行動と管理学会の果たす役割は益々重要になるものと思われまふ。今後類似の感染症の発生に備えて幅広い分野から様々な角度から研究調査を継続していくことが、この学会に課せられた使命ともいふべきかもしれません。

最後になりましたが、この新型コロナウイルス感染症に立ち向かっている多くの医療関係者に心から敬意を表するとともに、苦難、苦心を強いられている皆さんをお見舞い申し上げます。そして、一日も、一刻も早くこのトンネルの先の光を体に浴びることを願ってやみません。

編集後記

林 英明

(酪農学園大学)



ニュースレターの発行がいつも遅れてしまつて大変申し訳ありません。私の怠慢です。今年度は本学会に限らず、ほとんどの学会が中止となり、我々も残念に思っておりますが、せつかく一生懸命に卒論研究を行ってきたにもかかわらず、学会という発表の場を失ってしまったのは非常に残念でなりません。ただ、今回の特集にもありますように、試行錯誤を重ねながら、オンラインでのセミナーやシンポジウム、学会を実施される団体も増えており、このような状況の中でも様々な活動ができるようになってきております。

オンラインで実施する学会でも、様々な意見を交換し、今後の研究につながるアイデアを得ることが可能であると思えますが、個人的にはやはり対面での学会が開催できる日が来ることを切に望んでいます。面と向かって飲みながら話をしたいですね。やっばり。